清宗根付館 便り

光ミュージアムでの現代根付展のご報告

当館では根付の周知を図るため、全国の美術館や博物館などに貸出しを行っております。昨年9月7日～12月16日にかけて光ミュージアム（岐阜県高山市）にて「現代根付の進化展」～伝統を越えて、時代を超える日本美術の精華～ を開催しました。国内や海外から1万9000人ものお客様にご来場いただき、日本が誇る美術工芸品である根付をご覧いただきました。

数奇な運命に彩られた 現代根付の歩み

第二話 現代根付誕生前夜　戦後の海外向けの根付と象牙ブーム

前回は現代根付が誕生した背景をその歴史的な流れから概観しました。今回はさらに詳しく戦後から根付創作運動の機運が高まってくる 1960年代までを見ていきましょう。戦後はGHQ占領下となり、アメリカ兵などの外国人が多く日本を訪れました。彼らが本国に持ち帰る土産に日本独自の美術工芸品に注目が集まり、象牙を贅沢に使った置物から持ち運びしやすい根付が人気を博しました。江戸時代の根付は全国の地域ごとに独自性や特色がありましたが、明治以降需要の減少に伴い輸出に重点が置かれ、東京・谷中を中心とした関東圏の象牙職人たちが担うようになりました。高級根付（掲載写真1. 2）から、工房での普及品まで大きく二極化していきますが、旺盛な需要を応えて活況を呈しました。稲田 一郎（1891年東京生）は13才から象牙彫刻の修行を始め、途中画家を目指したが、1925年から根付彫刻を行う。顔料を施した彩色根付で名声を得ました。岸 一舟（1917年東京生）は 1947年から彫刻を手掛け、58年から根付創作を始めました。細密彫刻で定評がありました。そうした名工を輩出するも、当時は象牙彫刻の花形は置物で、携わる職人も多く、価格は象牙の重さに比例したため根付は置物を縮小した廉価版として見られていました。また輸出向けの工房は人物もの、動物もの、鳥もの、器物ものなどのジャンルごとに専門化され、また荒突き専門、仕上げ専門と細分化され、同じ図柄を大量生産するシステムを確立していました。そして貿易商などの商社が采配を振るい、受注から作品管理、象牙の手配、職人の生活の面倒まで、一貫した産業形態も整っていました。高度成長期を迎えた国向では印鑑や箸などの象牙ブームが起きましたが、この頃まだ根付は国内で一部の好事家をのぞいて広まりを見せることはありませんでした。1960年代は奇跡の経済復興を果たし社会的にも変革が迫られ、既存の価値観や社会の枠組みに対立する若者文化が花開いていきます。根付界でも若い象牙職人らが自由な創造や自己表現を追求する創作への情熱が高まりました。次号ではついに現代根付が萌芽を迎えます。

1. 稲田 一郎　「雪舟」高3.8cm
象牙　1956

2. 岸　一秀　「羽衣」高5.3cm
象牙　1959

2025年 4月～6月の特別企画展のご案内

美術か? 工芸か? 日本彫刻最大の謎『根付のたくらみ』展 第2弾

- 4月「精緻な技巧と大胆な造形」展 ■ 4月1日（火）～30日（水）
- 5月「漆芸の典雅な味わい」展 ■ 5月1日（木）～31日（土）
- 6月「金工と象嵌の華麗な挑戦」展 ■ 6月1日（日）～29日（日）

京都 清宗根付館 公式YouTube チャンネルを開設しました。今までの公式Twitter、Instagramでも、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

SAGAWA PRINTING

佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

ホームページ公式サイト　YouTube公式チャンネル

公益財団法人 京都 清宗根付館 とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。

宗 現代根付 Contemporary Netsuke Newsletter Salon

WINTER ~ SPRING　Issue. 19

［目次］

■企画展の見所
■根付館便り
■現代根付の歩み

［発行元］
公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地（壬生寺東側）
電話 075（802）7000
www.netsukekan.jp/

日本で唯一の現代根付専門美術館　京都 清宗根付館『企画展』のご案内

根付は人生を映したドラマ。『根付から始まる奇跡』展

当館の館長である木下宗昭は自身の体験から「根付とは不思議な芸術」と語ります。根付の造形に惹きこまれ、根付を通して本来出会うはずのなかった人との出会いを生みだし、結び合わせてくれる不思議な魅力を持っていて、それはまさに根付から始まる奇跡といえます。1月は「運命の出会いと根付」を紹介します。人生には数奇な運命が交錯する瞬間に、大きな展開を見せることがあります。思いがけない出会いによって感情や経験が揺さぶられ、往々にして現状を打開するきっかけを与え成長や学びにつながっていきます。そのようなドラマティックな出会いをテーマにした根付を特集します。2月は「奇跡のカタチと鑑賞法」として、根付のもつカタチに焦点を当てます。「自然を円筒形と球形と円錐形によって扱いなさい。」と語ったのはポール・セザンヌですが、根付においても幾何学的な構成によって偶然生まれた面白さはまさに奇跡の造形といえます。カタチの持つ効果なども踏まえながら、根付の鑑賞法を紹介いたします。3月は「結び合う世界と根付」として、縁を結び、時を結び、美を結ぶ根付をご紹介します。私たちは自分を縦糸に、世界を横糸にしながら編んでいくタペストリーのように人生を織り上げています。さまざまな関係性が絡み合った結び目が思い出となり、人生に彩りを添えていきます。「結び」がもたらす意外な発見をお楽しみください。

告知ポスター

2025年1月～3月 企画展の見所 ※掲載の根付は原寸サイズです

1月 その瞬間から物語が生まれていく。

■ 1月1日(水)～31日(金)

「運命の出会いと根付」展

新春にふさわしいテーマとして「出会い」を特集した新作根付を展示いたします。出会いといって想起される言葉として「一期一会」がありますが、茶会に臨む際にその機会は二度と巡らず、一生に一度の出会いと心得て、この瞬間を大切に誠意を尽くしなさいという心構えを説いています。人と人との出会いとは偶然に出会ったように見えても、それは必然によって出会わされているのかもしれません。出会いがきっかけとなって運命の歯車が動き出し、人生のドラマに大きな展開をみせるものです。そんな数々の「出会い」を表現した根付から、どんな物語が始まっていくのでしょうか。

落合 雅（1977～）
「出逢い」 高4.2cm
象牙

オウムは雌雄でともに子育てをすることから家庭安泰、夫婦円満の象徴とされる。また雄弁の象徴でもあり、愛の告白をしているのであろう。

及川 空観（1968～）
「越冬」～飢えと寒さのなかで～
高3.0cm マンモス牙・ルビー

寒波に見舞われ飢えに耐える極限状態の白鳥の親子。母鳥のとった決断は自分の胸を突き、その血を雛に与えることだった。母から子への愛を表現。

中畑 泰成（1953～）
「兄弟」 高3.0cm
黄楊

生まれたばかりの弟に出会った兄は、自分によく似た顔で、とても小さいことに驚き、自然と笑みがこぼれる。仲睦まじい様子が表情に出ている。

黒岩 明（1949～）
「小象の出合」 高4.3cm
象牙

戦後初めて来日した象のはな子は1950年から各地を巡回した。多くの子供たちとの出会いを通じて、戦争で傷ついた子供たちの心を癒した。

井上 猛（1940～）
「浜辺の詩」 高6.0cm
黄楊・象牙

浜辺に打ち上げられた巻貝の中では、二匹の蟹が出会ったという様子。浜辺に咲いていた花を送り、愛の詩を口ずさんでいるのだろうか。

2月 世界にひとつの造形の秘密を紐解く。

■ 2月1日(土)～28日(金)

「奇跡のカタチと鑑賞法」展

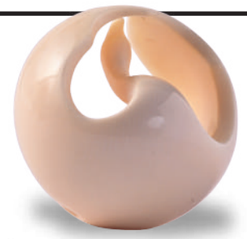
根付は実用に耐えうる堅牢な量感を持ち、強靭さをとどめる独自の造形（カタチ）を持っています。その基本を踏まえながら作家の遊び心と熟達の手腕によって作品に風趣が加わり世界で唯一の根付の奥深い世界が広がります。根付はカタチから生まれる特異な芸術様式を特徴とすることからも、2月はそのカタチに焦点を当てて探っていきます。また「自然を円筒形と球形と円錐形によって扱いなさい。」と語るポール・セザンヌの視点を手掛かりに根付の幾何学的な構成を読み解くことで、作品にカタチが与える効果を通じてご鑑賞のヒントになるような紹介もいたします。

高木 喜峰（1957～）
「四股」 高6.1cm
象牙

相撲の題材はよくあるものの、片足を高く揚げて四股を踏む姿は珍しい。逆三角形の不安定な構図によって勢いや動きを強調させている。

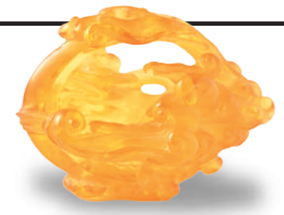
沢井 向円（1950～）
「布袋」 高3.0cm
黄楊

布袋は徳の高さから弥勒菩薩の化身とされる。多くの貧しい人を助けた慈悲の心と、皆からの感謝で袋が膨らんでいる。一点で支える造形が見どころ。



齋藤 美洲（1943～）
「着水」 高3.5cm
象牙

古典根付と西洋美術の融合を試みた意欲作で1970年代に発表し、その後の現代根付の新しい可能性を広げた。物語性を排除し、球体に還元している。



佐々木 明美（1959～）
「三日月」 高3.1cm
琥珀

琥珀でこれだけのサイズも珍しいが、欠けやすいため加工は慎重を要する。それを大胆にくり抜き、透明感と光沢によって儚い三日月を表している。

時田 英明（1979～）
「こぶ」 高4.4cm
ユウカリの木のこぶ

オーストラリアの先住民アボリジニの間では神聖な木とされるユーカリ。偶然できた瘤の不定形な輪郭を羊に見立て、奇跡的な造形となった。

3月 縁を結び、時を結び、美を結ぶ。

■ 3月1日(土)～30日(日)

「結び合う世界と根付」展

3月は「結び」をテーマにした新作根付を通して、さまざまな関係性の結びつきをご覧いただきます。私たちは自分を縦糸に、世界を横糸にして結び目を作りながらタペストリーのように人生を織り上げています。人と人、人と物、人と自然、人と超自然的存在などといった、さまざまな関係が絡み合うことで世界が構築されているもといえます。人間は他者との関係を通してしか自分を理解することはできません。人間関係の希薄化が見られる現代において「結び」の確固とした関係性は見直されるなか、根付を通して世界と結ばれる関係性に注目した新作根付を中心に展示いたします。

阿部 裕幸（1952～）
「エン結び」 高4.3cm
象牙

猿はエンとも読めることから縁結びの象徴として親しまれている。また猿はサルことから困難が去る縁起物とされている。

東 声方（1937～2003）
「結びの一番」 高6.5cm
黄楊

取組みの締めを意味する結びの大一番は「東西東西（とざいとーざーい）」の口上から始まり、力士たちの力のこもった争いで有終の美を飾る。

立原 寛玉（1944～）
「童話の中に…」 高4.3cm
象牙

『おむすびころりん』はよく知られた昔話。作品ではおむすびを持った鼠と杵から餅つきを連想させる鼠、小判を暗示させる打出の小槌がある。

森 哲郎（1953～）
「桃園の誓い」 高5.4cm
象牙

「桃園結義（とうえんけつぎ）」ともいう。劉備のもとに関羽と張飛が桃園に集い義兄弟の契りが結ばれた、三国志の名場面。

田神 十志（1957～）
「祝酒」 高4.1cm
象牙

日本酒は、神様と結びつきが深く、神事儀礼には欠かせない。新年を控えた大晦日、寒いなか若い娘が酒を買って戻ると子犬が駆け寄る。